6/5/2012

S. Ashina

前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

１．イデオロギーとユートピア

１－１：リクール１

１－２：マルクスとマルクス主義

１－３：黙示的終末論の系譜

１－４：ティリッヒ１

１－５：ティリッヒ２

１－６：リクール２ 6/12

１－７：知恵思想の視点から 6/19

１－８：パウロとローマ帝国 6/26

２．キリスト教社会主義

２－１：キリスト教社会主義の―イギリス・アメリカ・日本― 7/3

２－２：宗教社会主義―ティリッヒ― 7/10

２－３：賀川豊彦のキリスト教社会主義 7/17

２－４：解放の神学 7/24

Exkurs

キリスト教と仏教１

キリスト教と仏教２

＜前回＞二つの歴史神学―ティリッヒ、アウグスティヌス、ヨアキム―

（１）アウグスティヌスの「神の国」論と歴史神学

１．黙示的終末論からの離脱

　二つの立場、つまり千年王国論とオリゲネス主義との対決

３．「アウグスティヌスの初期の作品には、もっと古い千年王国の観念の影響が窺える」、「黙示文学的な期待の残響が見られる。」（マーカス、41）

４．『神の国』の時期（413-426年、59-72歳）：

・ドナティスト論争（50 歳代）：迫害によって教会を裏切った聖職者のサクラメントは有効か（サクラメントの有効性をめぐる論争、事効論と人効論）。教会の聖性（聖なる教会）とは何か。厳格主義者としてのドナティスト。再洗礼を主張。

・千年王国論を明確に否定するに至る。ヨハネ黙示録のテキストをオリゲネスと同様に比喩的に解釈。

５．千年王国の現在性

６．キリストと聖徒たちによる「千年間の支配」はすでに教会の中に現前している。「教会は現在においてもキリストの御国」（158）

８．教会論：善悪の混合体としての教会

　教会は聖なるものであるが、現実の教会は完全な聖性を有していない。悪や罪を内にもっている。教会の聖性は構成メンバーの聖性ではなく、サクラメントと聖霊による。

９．歴史の規定する二つの原理、神の国（civitas dei）と地の国（civitas terrena）

・歴史的実在は、この二つの原理の混合（corpus mixtum）

10.「今ここでエクレシアは「聖」であっても、常に混合体であるべきである。その中には「世界」においてと同様に、二つの国が解き難く絡み合っている。この観点から見る

と「教会」と「世界」とは区別はない」、「王国は神の創造の目的の最終的な完成である。教会はそうではない。教会は仮の制度であり、世界の中にあるその固有の存在はそれ自体暫定的である。教会と世界の二重性そのものが終末論的王国の中で止揚されるであろう。」（マーカス、191）

「ローマ帝国におけるコンスタンティヌス、もっと正確にはテオドシウスによるキリスト教の体制化の拒否、および『キリスト教帝国』の背後にある神学の拒否」（179）

11.「アウグスティヌスの終末論は、オリゲネス主義的な歴史循環論の残滓を払拭した点で、古代的なものから決別した。しかしそれは、物質主義的なものより、霊的なものにいたるまで一切の千年王国説を否定した。だがそのために、千年王国説に内蔵されていた未来主義的志向をも抹殺してしまった。」（坂口、27）

（２）ヨアキムの歴史哲学の意味

13．Tillich

The Augustinian view places the reign of Christ, the thousand-year period, in the present time and identifies it with the control of this period by the hierarchy and its divine graces. The sacramental power of the hierarchy makes it the immediate medium of Christ, so that the thousand-year period, the monarchy of Christ, is the monarchy of the church. Since this is the last period, according to Daniel, there is no future any more; the thousand years are here and we live in them.

Joachim renewed the idea of the thousand years of Christ which is still lie in the future.（175-176）

This means that something is still ahead. The perfect society, the monastic society, will still come, and when measured by it not only the Old Testament society but also the New Testament society, the church, must be criticized.

Another idea is that truth is not absolute, but is valid for its time.

This is dynamic concept of truth, the idea that truth changes in history according to the situation. The early church had to apply this principle always to the Old Testament. The truth of Old Testament is different from that of New Testament, and yet it also is the divinely inspired Word of God. To account for this theologians spoke about dispensations or covenants. The idea of the *kairos* was used, which means that as the time is different, so the truth is different.

From this it follows that the church is relative.（178）

14．二つの歴史哲学　→　歴史的現実における弁証法的相互連関（真理の歴史的動態、真理は時間・カイロスに規定される。隠れつつ現れ、現れつつ隠れる）

この弁証法が解体するとき、そこにイデオロギーとユートピアの二分法が現れる。

１―５：ティリッヒ２

（１）問題―ティリッヒのカイロス・ユートピア論―

１．「なお、一つの問いが提出され、簡単に答えられるであろう。すなわち、『カイロスについてのメッセージが間違いであるということは、あり得るだろうか』。答えは難しくはない。メッセージは常に誤りである。なぜなら、メッセージは理念的に見られてはいても、決して実在ではないもの、現実的に見れば長い時間経過において実現され、しばしば長い時間経過の後にはじめて顕わになるものを、直接的な近さの内に見るからである。しかるにまた、カイロスのメッセージは、誤りではない。なぜなら、それが無制約的なもの

からのメッセージとして告知されるところでは、カイロスは常にすでにそこに現存しているからである。すでに萌芽においてそこにあるのでないとするならば、カイロスが告知されることは不可能であろう。」（Tillich, 1922, 71-72）
２．宗教社会主義へのコミットメント（1920 年代初頭以来）
歴史哲学の基本概念：ユートピア、カイロス、神律、デモーニッシュなもの。
「宗教社会主義者たちが体験した切迫する歴史的転換についての意識」（歴史の趨勢を規定する決定的な事態が現実化しつつある）は、果たして、いかなる現実性を有している（いた）のか、それは単なる主観的な思いこみや幻想とどこが違うのか。
単なる幻想としての「ユートピア」から、自らのカイロス論をいかに区別するのか、という問題。
３．前期ティリッヒのユートピア否定論
「宗教社会主義は、個別的－創造的、具体的－歴史内在的に目標を立てる点で、ユートピアから区別される。宗教社会主義は神律を目指すのであって、合理的ユートピアたろうとするものではない。」（Tillich, 1923, 110）

（２）ユートピアの存在論的基盤
４．後期ティリッヒのユートピア論：「諸民族の生におけるユートピアの政治的意義」（1951）。ブロッホやマンハイムのユートピア論
５．ブロッホ『希望の原理』
幻想、妄想、非存在と同一視されてきたユートピア的なものの実在性・現実性―未だ存在しないもの（未存在）の、存在へ到来せんとしているものの現実性―についてのブロッホの問い。「前向きの夢」、「既成の日を乗り越えていく希望」、「可能的現実性のなかにありながらまだ現実には到来していないもの」をどのように捉えるのかという問い。
↓
神の約束とそれによって切り開かれた希望の地平という問い。
もし、メシアの到来や死者の復活に一切の現実性が存在しないとするならば、キリスト教は神の約束の未来に対してどうしてなおも信頼し希望を持ち続けることができるだろうか。
６．「待望の神学者」ティリッヒとユートピアの両義性
「もし、ユートピアが価値のない幻想以外の何ものかであるとするならば、それは人間の構造自体の中に基礎を持たねばならない。」（Tillich, 1951, 532）
「ユートピア的な諸形式で思惟することが人間存在に属するとするならば、ユートピアは人間が取り除きうるものではなく、人間が存在する限り存続するものなのである。」（ibid.）
７．存在論的人間学（『組織神学 第一巻』）→　ユートピア論
ユートピアがしばしば無価値な幻想に陥るにもかかわらず、それが人間にとってなおも有意味であるという論点。
有限性あるいは有限的自由（人間存在の根本的な存在様態）→存在論的不安→不安のただ中で自らの存在を肯定する勇気。
８．不安と勇気という実存カテゴリー（事物存在とは異なる人間固有の存在形式）と「待望」（Erwartung）という時間的な実存カテゴリーとの関係性。ユートピアは単なる偶発的な事柄ではなく、人間存在自体に根ざしている。
「それゆえ、わたしは待望というもう一つのカテゴリーに到達する。このカテゴリーは今

や我々をユートピア問題に直接連れて行くのである。待望には不安と勇気の二つが存在する。しかし、それは過去との関わりにおいてではなく、未来との関わりにおいてである。待望は人間の本質を構成する諸可能性の成就を未来に期待する。この諸可能性はあらゆる制約された状況を越えて行く人間の無限の能力のゆえに無限の可能性なのであり、成就されざる可能性だったのである。人間は勇気を持っている―ニーチェが正当にも＜勇敢な動物＞と呼んだように―。なぜなら、人間は、所与のものを越えて未来のものへと向かって進む待望の中を、前進するからである。」（ibid., S.537）

９．人間存在における不安と勇気の二重性（両義性）

→　待望、ユートピアの根本的な両義性

ユートピアの肯定、否定、そして超越。

10．ユートピアの肯定面：「ユートピアの豊穣さ（Furchtbarkeit）」

「ユートピアは真理である」、「ユートピアは人間の本質、つまり人間の実存の内的目的を表現する。」（ibid., S.568）

ユートピアは、それがもたらす豊かなイメージなしには人類が意識化できなかったような無数の可能性を先取り的に開示する。ユートピアは人間の感性に直接訴えかけ人間を行動へと駆り立てるものとなる。ユートピアは所与のものを変革する力（Macht）を有している。→既存の秩序・権益の保持を意図する権力にとっては危険な存在、異端的な存在。

社会的構想力としてのユートピア：理性と感性の統合機能としての構想力自体に本質的に備わっている。

11．ユートピアの否定面：ユートピアの不毛さ

ユートピアは非真理性であり、人間の疎外状況を越えことを勧めるものの、「それがいかにして可能であるか」を真実には語らない（ibid.，S.570）。ユートピアは不可能なものをあたかも可能であるかのように見せかけ、「幻想的に誇張された願望」へと人間を導く。ユートピアは人間を幻滅に陥れるだけの無力なもの。歴史の両義性を無視したユートピア主義は、「字義通りに解すれば、偶像礼拝」（Tillich, 1963, 355）である。

12．議論の要点は、次のようになる。

①ユートピアは人間存在自体に根ざすものであり、人間が人間であり続けるかぎり、消滅することはない。人間はユートピアを必要とし、ユートピアは、構想力を通して、常に新たな形態を獲得するのである。

②ユートピアは両義的である。真理であると同時に、非真理である。これは、次章に見る、ユートピア主義とユートピアの精神との区別という議論へと展開される。

③ユートピアの否定面、つまりユートピア主義は克服されねばならない。

（３）ユートピアの超越とユートピア精神

13．人間存在の両義性→ユートピアの両義性

現代において、ユートピア思想、あるいは千年王国論や黙示的終末論を再評価しようとする試みは、ユートピアの肯定性を保持しつつその否定性を克服するもの、つまりその意味におけるユートピアの超越でなければならない。

14．ユートピアの超越＝ユートピア自体の根拠から発する、ユートピアの否定性の克服。「根源的に越えてゆくとは、水平的なもの、常に進展するものの線上でなされるのではなく、垂直線上において越えてゆくことを意味している。」（Tillich, 1951, 573）

15．ユートピアの超越を人間が所有し自由に操作できる→ユートピア主義

16. 宗教自体に内在する偶像化（自己絶対化）の可能性。
「第一に、カイロイは、デーモン的な仕方で歪曲されうる。第二に、カイロイは誤りうる。後者の特性は、＜偉大なカイロス＞においてでさえも、常に何らかの度合いで、そうなのである。」（Tillich, 1963a, 371）

↓

17. 「限界」（否定性）を内在する精神性。批判的契機を自らの外部に持つこと。
キリスト教によってのユダヤ教の本質的な意義。
cf. レヴィナス

18. ユートピアの超越のメルクマール：歴史における自己否定的なものの出現、自己の偶像化に対する否定を内に組み込んだものの現実化。
神の自己否定（弱さ）の意味。

19. キリストの十字架の象徴。
歴史解釈とキリストの相関性：キリストの出来事＝「歴史の中心」――歴史の意味付与原理、歴史的意味連関の構成的かつ批判的原理――という仕方で、歴史解釈に相関する。
十字架と復活という中心的な複合的象徴によってイメージ化された「歴史の中心」は、歴史の両義性の中にあってなおも、ユートピアの否定性を克服する具体的な現実（新しい存在）を指し示している。

20. ユートピアの精神：ユートピアの否定性を克服する現実への志向性。
「重要なのは、ユートピアを克服するユートピアの精神なのである。」（Tillich,1951b,.578）
神の国をその二面性（人間の歴史的現実性に対する内在と超越）において、断片的に先取りする。ユートピアの存在論的な源泉であるとともに、その歪曲と歪曲の克服という二つの事柄の共通の源泉として機能する。

21. 歴史の両義性の最終的な克服：終末の事柄であり、歴史の中を生きる人類にとっては、希望の事柄。

（４）待望の現実主義としてのユートピア

22. 1920 年代初頭の熱狂的な時代状況（初期のカイロス論）は、比較的短期間で過ぎ去り、ティリッヒの思想もより現実主義的なものへと移行。

23. 時代の大きな転換を熱狂的に体験することは冷静な現実感覚と決して矛盾しない。
「希望を抱くことは、しばしば待つことを含んでいる。」（Tillich, 1965, 186）

24. 静かな緊張の内にあって、到来しようとしているものを受け入れる用意をしつつ待つこと。この「待つ」態度こそが、一見カイロスが喪失したかに見える空虚さにおいても、なおも希望を持ち続ける信仰者のあり方に他ならない。
1933 年の「待望の現実主義」から、第二次世界大戦後の「聖なる空虚さ」に至るまで。

25. バルト「過去と将来」（1919）
「ブルームハルトのメッセージと使命における預言者的なものは、次の点に存している。すなわち、急ぐこと（das Eilen） と待つこと（das Warten）とが 、この世的なものと神的なものとが、そして現在的なものと到来しつつあるものとが、彼の語りと行為とにおいて、互いに、出会い、一つとなり、補い合い、繰り返し求め、見いだしたということである」。（Karl Barth, Vergangenheit und Zukunft, in: Jürgen Moltmann（hrsg.）, *Anfänge der dialektischen Theologie. Teil 1*, Chr. Kaiser 1962, S.48f.）

＜補足＞

(1) 芦名定道『Ｐ．ティリッヒの宗教思想研究』(京都大学に提出した学位論文・1994 年)の第二部第５章「カイロス論と歴史解釈」、http://tillich.web.fc2.com/sub6.htm

(2) ティリッヒの「ユートピアの精神」という表現は、ブロッホの同名の書(1918)に由来(「カイロスとユートピア」(1959)の注１(GW.VI, S.149))。

マンハイム『イデオロギーとユートピア』への言及(Tillich, 1933, .372)。

(3) 「未存在の存在論」(die Ontologie des Noch-Nicht-Seins) は、ブロッホの希望の哲学、ユートピア論の核心部分を構成している、ブロッホの行う「ユートピア主義」と「ユートピア的なもの」との区別 (mus zwischen Utopistischem und Utopischem unterschieden werden. Ernst Bloch, Tubinger Einleitung in die Phiolosophie, Suhrkamp 1985, S.95) は、ティリッヒの「ユートピア主義」と「ユートピアの精神」との区別に対応。

(4) 「社会主義は、もっとも明晰かつ冷静な現実主義に依存している。しかし、それは信仰的現実主義であり、待望の現実主義 (Realisimus der Erwartung)なのである。」(Tillich 1933, 287-288)

(5) ティリッヒが相関の方法の枠内で展開した『組織神学』の存在論的人間学。

芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、 1995 年 243-328 頁。

(6)「カイロスの気づき(awareness)は、ヴィジョンの事柄である。それは、心理学的あるいは社会学的用語によって与えられ得る分析や計算の対象ではない。それは、距離を置いた観察の事柄ではなく、巻き込まれた経験の事柄なのである。しかしながら、このことは、観察と分析が排除されることを意味しない。観察や分析は、ヴィジョンを客観化し、明確で豊かなものとすることに仕えるのである。」(Tillich,1963a, 370-371)

＜文献＞ **Tillich**

1922: Kairos（MW.4）

1923: Grundlinie des Religiösen Sozialismus. Ein systematischer Entwurf (MW.3)

1926a: Das Dämonische, Ein Beitrag zur Sinndeutung des Geschichte (MW.5)

1926b: Kairos, Ideen zur Geisteslage der Gegenwart (GW.VI)

1926c: Kairos und Logos, Eine Beitrag zur Sinndeutung der Erkenntnis (MW.1)

1931: Protestantische Prinzip und proletarische Situation (MW.3)

1933: *Die sozialistische Entscheidung* (MW.3)

1951: Die politische Bedeutung der Utopie im Leben der Völker (MW.3)

1963: *Systametic Theology. vol.3*, The Univ. of Chicago Press.

1965: The Right to Hope, in: *Theology of Peace* (ed., Ronald H. Stone), John Knox Press, 1990, pp.182-190.